

1. 文学部

I	文学部の研究目的と特徴	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	1 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 8
III	質の向上度の判断	1 - 10

I 文学部の研究目的と特徴

研究目的

1. 本学部は「社会の要請と世界の情勢に対応し得る研究課題に取り組む」という中期目標のもと、各教員が人文科学の諸各分野において質の高い先進的な研究活動を多面的、持続的に推進し、学界と社会に貢献することを目標とする。
2. 文化・社会現象の多面的、総合的な考察を目指して、学際的かつ組織的な共同研究活動を行う。特に、本学部ならではの総合的な研究プロジェクトを立ち上げ、これを強力に推進し支援する。
3. 研究の国際化が急速に進展している中、本学部教員による国際的な研究活動を促進する。また、このための支援と協力体制を組織的に行う。
4. 研究成果を地域社会に還元していくことは大学の責務でもある。本学部は、地域社会との交流、学術成果の社会還元を目指し、研究の社会貢献を促進し支援していく。

研究の特徴

本学部の特徴は、「人間とは何か」を探究することを共通理念として、きわめて多様な研究分野と方法を包含した多彩な研究活動を行っていることにある。しかも、その研究分野は人文科学諸領域のほぼ全てをバランスよく網羅している。同時に、これは学部内での学際的かつ総合的な共同研究を容易に可能にする基盤を有していることにもなる。また、岡山という地域に根ざした研究とともに、国際的な研究を重視していることも特徴といえる。

[想定する関係者とその期待]

本学部の研究における関係者とは、学術面では、国内外の学界、諸研究機関等を想定し、文化面では、地域および一般社会、国際社会、マスコミ等を想定している。またその期待とは、学会誌の査読、審査（刊行助成等）等の通過、また書評、学界展望、新聞記事などへの掲載などをいう。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

研究体制と分野

平成 19 年 5 月 1 日の時点で、文学部の組織は、教授 38 人、准教授 33 人、講師 1 人である。うち女性教員は 14 人、外国人教員は 4 人である。特に女性教員は全教員数の 19.4% を占め、国立大学の平均(11.1% : 「科学技術政策研究所報告書」)を上回っている。また、各教員の研究分野は、人文学のほぼ全ての分科および社会科学の心理学、社会学の分科を包含し、非常に多様な領域において研究活動を行っている。以下、本学部の目的に応じた観点で状況を見ていく。

1) 研究活動の実施状況

(1) 成果の発表

本学部の目的として、「質の高い先進的な研究の多面的、持続的な推進」を挙げたが、研究活動の指標となる教員の著書および論文の総数(平成 16 年度～19 年度)とその年度別発表数を次に掲げる。

資料 II - 1 - 1 : 学術著書・論文(単著)の発表状況

著書 総数	著書 16 年	著書 17 年	著書 18 年	著書 19 年	論文 総数	うち 査読付	論文 16 年	論文 17 年	論文 18 年	論文 19 年
27 件	8 件	5 件	10 件	4 件	375 件	64 件	93 件	98 件	98 件	86 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)、文学部教員研究活動一覧(平成 20 年 3 月)ほか)

資料 II - 1 - 2 : 学術著書・論文(共著)の発表状況

著書 総数	著書 16 年	著書 17 年	著書 18 年	著書 19 年	論文 総数	うち 査読付	論文 16 年	論文 17 年	論文 18 年	論文 19 年
42 件	6 件	16 件	10 件	10 件	37 件	22 件	9 件	5 件	12 件	11 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)、文学部教員研究活動一覧(平成 20 年 3 月)ほか)

論文(単著・共著)数からは、毎年、持続的な成果の公刊が行われていることがわかる。年間平均すると教員 1 人あたり 1.4 件以上になる。なお査読率は 21% 程度で、5 本に 1 本はレフリー付論文に投稿していることがわかる。

教員の研究発表(学会発表、講演など)の年度別発表数は次のとおりである。

資料 II - 1 - 3 : 口頭発表等の状況

発表総数	16 年	17 年	18 年	19 年
257 件	80 件	69 件	52 件	74 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)、文学部教員研究活動一覧(平成 20 年 3 月)ほか)

平成 18 年は若干少ないが、年間平均 70 件近くあり、教員 1 人がほぼ年 1 回学会発表等をしていることになる。

(2) 研究資金の獲得状況

科学研究費補助金の申請状況と採択の比率は次のとおりである。

資料Ⅱ－１－４：科学研究費補助金の申請状況と採択状況

部局等	申請件数	採択件数			直接経費	教員数 (4月1日) F	教員1人 当たり	新規分	新規分
	新規分	新規	継続	計	内定金額		採択件数	採択率	申請率
	A	B	C	D	E		D / F	B / A	A / F
16年度	17件	4件	18件	22件	25,800千円	68人	0.32件	23.5%	25.0%
17年度	20件	7件	14件	21件	29,029千円	68人	0.31件	35.0%	29.4%
18年度	40件	7件	17件	24件	38,000千円	69人	0.35件	17.5%	58.0%
19年度	39件	8件	18件	26件	36,300千円	72人	0.36件	20.5%	54.2%
20年度	41件	9件	14件	23件	38,400千円	71人	0.32件	21.9%	57.7%

(出典：「科学研究費補助金部局別申請・採択件数」「同交付決定一覧」なお、18年度以降は文学部教員が学部から大学院に移籍したため、社会文化科学研究科より文学系を抜き出し資料とした)

新規の申請率では、平成18年度以降は大幅に増えた。平成18年度以降は新規継続を合わせ、学部のほぼ8割の教員が申請していることになる。教員1人当たりの採択も年々増えている。年平均の獲得金額は33,500千円となり、この金額は平成19年度の文学部の個人研究費総額(約30,000千円)を上回るものである。ただ上記の表からも分かるように新規の採択率が低いことは問題である。

なお、科研分担を含めて学外との共同研究は、平成16～19年で総数20人以上の教員が120件程度の共同研究を行っている。

寄付金の受入状況については、平成16年度2件(350千円)、平成17年度2件(960千円うち1件200千円は自己資金)、平成18年度4件(5,134千円うち1件は学会余剰金)である。

また、学長裁量経費等・特別配分経費の研究資金獲得の状況は次のとおりである。

資料Ⅱ－１－５：学長裁量経費等・特別配分経費獲得状況（追加配分は除く）

16年度	17年度	18年度	19年度
5件	5件	5件	1件
15,036千円	12,000千円	10,000千円	7,499千円

(出典：平成16年度～19年度「学長裁量経費・特別配分経費」(社文研会計係資料))

平均して年11,000千円以上の配分があり、研究推進にとって大きな原資となっている。

文学部では、以下に述べる3大プロジェクト研究を中心に、萌芽的研究をふくむ学部内の共同研究活動の促進と支援を部局長裁量経費によって行っている。毎年6月前後に「文学部プロジェクト」として学部内で公募、選定した上で研究経費を配分している。特に3大プロジェクトには優先的に経費を配分し、その推進に対する財政的支援を行っている。またその成果報告書作成経費やシンポジウム等に対する経費の配分も行っている。平成16年から平成19年までの経費配分の内訳は別添資料1(部局長裁量経費による研究資金交付状況、P1)のとおりである。

このほか部局長裁量経費により、文学部教員主／共催の海外研究者講演会(別添資料2：文学部教員主／共催の海外研究者講演会、P1)に対する財政的支援等も行っている。

(3) 学術上の受賞

当期における学術上の受賞は 6 件(日本地理学会賞, 農業土木学会賞, 渋沢賞, 岡山県文化奨励賞(2 件), 岡山市文化奨励賞)を数え, すぐれた研究の成果が学界や社会で認められていることを示している。

2) 3 大プロジェクトの推進

(1) 研究課題と活動状況

文学部では, 目的の 2. に挙げたように, 第 1 期中期計画において, 次の 3 つの研究課題を掲げ, 学部をあげて取り組んだ。

- ① 「日本文化の固有性の探求」: 日本文化を文学・歴史・芸術・思想等の諸領域にわたる総体として捉え, 諸外国文化との比較を通して固有性を探求する。
- ② 「空間情報科学による人文科学研究」: 地理情報システムなどの空間情報科学を用いて, 歴史学や考古学をはじめとする人文科学研究を推進する。
- ③ 「ジェンダーに関する学際的研究」: ジェンダーの多様性・普遍性・可変性を多角的に分析し, 独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究を行う。

これらに対する研究経費は, 上記の部局長裁量経費あるいは学長裁量経費のいずれかによって毎年優先的に保証されている。①②③についての活動状況と報告書は別添資料 3 (「文学部 3 大プロジェクト」についての活動と報告書等, P2) のとおりである。このプロジェクトと関連する著書・論文には, S に該当すると判断されるものが 15 編あり, 質の高い研究がなされていることが分かる。

(2) 人文学フロンティア 2007

平成 19 年度には, これら 3 プロジェクトの成果を集約する一環として「人文学フロンティア 2007」という以下のような企画を計画, 実行した。

資料Ⅱ－1－6 人文学フロンティア 2007

アクション 1	デジタル歴史考古学(4 講座)	岡山市デジタルミュージアム	6 月	4 回(各 100 名参加)
アクション 2	ジェンダー教育ってなに?	岡山大学	8 月	1 回(100 名参加)
アクション 3	揺らぎのなかの日本文化 シンポジウム:「日本の原像」「日本における怪異と美意識」「外から見る日本の美術」	岡山大学	10 月	3 回(各 200 名参加)
アクション 4	今, この社会で働くということ	岡山大学	12 月	1 回(100 名参加)

(出典: 平成 19 年 4 月教授会資料等; 参加者についてはプロジェクト主催者による)

この企画は, 3 大プロジェクトの成果をまとめるとともに, 教育活動や社会連携活動としての側面を重視しつつ, 成果を一般市民や学生・高校生等に普及・還元することを目的としたものである。この企画で開催されたさまざまなシンポジウム, 講演会, 模擬授業等には多くの市民, 学生, 高校生が参加し, 有益であったとの結果を得た(参加感想文 57 人; 別添資料 4: 人文学フロンティアに対する感想, P3)。

3) 国際的な研究活動とその支援

(1) 国際的な研究業績と研究発表

本学部は, 目的 3. にあるように国際的な研究活動の促進と支援を行っているが, 本学部教員の国際的な研究業績(海外誌の論文掲載, 外国書の執筆など)及び海外での研究発表(招待講演等を含む), 共同研究は以下のとおりである。

資料Ⅱ－１－７：国際的な研究業績

発表総数	16 年	17 年	18 年	19 年
21 件	3 件	4 件	10 件	4 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)ほか)

資料Ⅱ－１－８：国際的な学会での発表（招待発表を含む）

発表総数	16 年	17 年	18 年	19 年
81 件	25 件	26 件	15 件	15 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)ほか)

資料Ⅱ－１－９：国際的な共同研究

発表総数	16 年	17 年	18 年	19 年
15 件	3 件	4 件	5 件	3 件

(出典：社文研教員調書(平成 19 年 12 月)ほか)

また本学部は、セルビアのベオグラード大学哲学学部と平成 15 年より部局間協定を結んでおり、学生交流、共同研究、学術情報の交換等を継続的に行っている。

(2) 客員研究員

共同研究等のため招聘された外国人客員研究員は、平成 16 年度 1 人、平成 17 年度 2 人、平成 18 年度 1 人、平成 19 年度 5 人、平成 20 年度 4 人(予定)となっており、毎年継続的に国際的な研究が行われている。

(3) 長期研修制度

教員がおもに海外で長期にわたって研究に専念できる環境をつくる目的で、平成 16 年度より半年間の長期研修制度（サバティカル）を設けている。平成 17 年度 1 人（英国）、平成 18 年度 1 人（ドイツ）、平成 19 年度 2 人（フランス、国内）がこの制度を利用した。

4) 研究成果の社会還元

(1) 公開講座

本学部は、毎年無料で市民向け公開講座を開催し、研究成果を分かりやすく講義している。毎年、短期間で受講定員が充足し、受講後のアンケートでも満足度が高い。

資料Ⅱ－１－10：公開講座

年度	題目	回数	受講者	修了者率	期待・満足度
16 年度	ポピュラー・カルチャーの諸相	5	36 人	64%	83%
16 年度	史料からみた新しい岡山の歴史	6	98 人	62%	99%
17 年度	文学と宗教・思想	6	109 人	56%	87%
17 年度	アジアと日本	6	122 人	69%	90%
18 年度	日本のかたち、日本のこころ	6	113 人	73%	81%
19 年度	日本語を見つめなおす	5	109 人	59%	82%

(表の期待・満足度はアンケートの「期待以上、期待どおり」「とても満足、まあ満足」を足したもの)

(出典：平成 17 年度－平成 19 年度文学部公開講座アンケート集計結果(庶務係作成))

(2) 公開シンポジウム

上記 2) の (2) にあるように本学部では 3 大プロジェクトに関するさまざまなシンポジウム、講演会等を開催したが、これらには多くの市民が参加し、本学部の研究成果を社会還元するのに貢献した。参加者の感想も好評であった（別添資料 4：人文学フロンティアに対する感想，P3）。

5) 研究支援体制

本学部では、上記のさまざまな取組を統括する研究支援組織を構築している。この組織は、文学部プロジェクトの公募選考と財政的支援、科研費等外部資金獲得に対する情報提供と支援、3 大プロジェクトの推進、シンポジウム・講演会等の実施と財政的支援、長期研修制度の運用、国際的な研究・講演支援等、研究に関する上記のさまざまな取組を支援・実施している。平成 18 年度までは、各講座から選出された委員等で構成された研究委員会を組織していたが、平成 19 年度からは、より機動的で効率的な運用を行うため、委員会組織から研究担当副学部長を中心にした支援組織に衣替えし、活動している。

観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

なし

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

論文数、著書、学会発表とも毎年コンスタントな数が保たれ（資料Ⅱ－1－1：学術著書・論文（単著）の発表状況，資料Ⅱ－1－2：学術著書・論文（共著）の発表状況，資料Ⅱ－1－3：口頭発表等の状況），持続的な研究が展開されている。論文発表、学会発表では、教員 1 人当たり年 1 件程度、著書（単著共著）は 4 年で 1 冊程度である。同時に科研費等の申請、採択も増えており（資料Ⅱ－1－4：科学研究費補助金の申請状況と採択状況），個人研究費を上回る外部資金を獲得するなど、活発な研究活動が行われている。また査読を経た論文は 21% あり、学界の期待に込んでいると言える。

学部の 3 大プロジェクトについては、学内の裁量経費による確実な財政的支援のもと、多くの成果を挙げており（別添資料 1：部局長裁量経費による研究資金交付状況，P1），特に関連する論著には S に該当するものが 15 編あった。また、同時にプロジェクトの成果を社会に還元する活動も活発に行われている（資料Ⅱ－1－6：人文学フロンティア 2007，別添資料 3：「文学部 3 大プロジェクト」についての活動と報告書等，P2）。

国際的な研究活動では、国際的な学会での発表、共同研究が着実に進められており（資料Ⅱ－1－7：国際的な研究業績，資料Ⅱ－1－8：国際的な学会での発表（招待発表を含む），資料Ⅱ－1－9：国際的な共同研究），学界に貢献している。

研究成果の社会還元については、公開講座、シンポジウム等を積極的に開催し、関係者の満足度も高い（資料Ⅱ－1－10：公開講座，別添資料 4：人文学フロンティアに対する感想，P3）。以上の理由から、本学部の研究活動の状況は、本学部の目的に照らして、期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附属研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

1) 優れた研究業績の全体状況

「学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(I表)」に示したように、学術的な意義の点で優秀である(S)と判定されるものが28件、社会・文化的意義の点で卓越している(SS)と判定されたものが4件、優秀である(S)と判定されたものが4件とすこぶる多くの優れた業績を選定することができた。限度数(構成員の半数)一杯まで選出したことになるが、同一著者による業績をいくつか割愛しており、実際にはこれを上回る数の優れた業績が存在する。なお、学術的意義の点で卓越した業績(SS)を選定していないが、これは、人文分野の場合、目に見える形で学界の評価が定まるのに相当な時間を要するためである。特定の分野に偏ることなく、幅広い領域で優れた業績が見られることは、本学部の研究の水準の全体的な高さを示しており、また社会に紹介され注目を浴びている業績に卓越したものが多く見られることも、本学部の特徴である。

2) 優れた著書の出版状況

人文学における研究活動の基礎をなす学術出版が質的・量的に十分に行われているかどうか、また、その学術性が書評等を通じて学界や社会に十分に認知されているかどうか、という点から「研究業績説明書」(Ⅱ表)の分析を行うと、優れた業績として選定された学術出版が16件見られ、十分な量の業績が見られる。また、学界や社会での評価・認知については、以下のように分析される。まず注目されるのは、研究業績リスト68-1-1002, 1003, 1016, 1024, 1027など、学会誌等の書評に取り上げられて著名な学者から高い評価を得ているものが多数あるということである。また、優れた研究業績リスト68-1-1008, 1014, 1020, 1028は、複数の報道機関が取り上げて出版の意義を認めており、社会的な注目度も高い。人文分野における業績評価の指標として、学術出版が健全に行われているかということがきわめて重要であるが、上記の分析結果は、本学部の研究の層の厚さを物語っている。

3) 査読つき論文の掲載状況

本学部の構成員がそれぞれの所属学会等の学術組織において主導的な役割を果たしているかどうか、という点について、国際的な学術組織が評価した論文、あるいは、学界を代表する査読つき論文の掲載実績を通じて分析した(資料は「研究業績説明書」(Ⅱ表)による)。優れた業績として選定した査読つき論文の数は、15編に及ぶ。選定論文15編のうち、「ハインネとシューマン没後150年記念国際会議」(研究業績リスト68-1-1011)や「国際シンポジウム「世界の事前考古学」」(研究業績リスト68-1-1022)など、国際会議・国際シンポジウム等を舞台としたものが8編、『東洋史研究』(研究業績リスト68-1-1021)や『心理学研究』(研究業績リスト68-1-1036)など、著名な査読つき学会誌に掲載されたものが7編であり、文学部の業績が国内だけでなく国際的にも重要な役割を果たしていることが窺える。なお、15編という数は、優れた業績の全体数を選定限度数内に抑えるために割愛した結果であり、本学部における査読つき論文の全体数はこれを大幅に上回る(資料Ⅱ-1-1:学術著書・論文(単著)の発表状況)。

4) プロジェクト研究の進展状況

本学部の研究活動を代表し、特色づけるようなプロジェクト研究の成果がどのように見られるかについて分析した。本学部では、上記のように、重点的に取り組む領域として、

①日本文化の固有性の探求，②空間情報科学による人文学研究，③ジェンダーに関する学際的研究，の3つのプロジェクトを推進している。「研究業績説明書」（Ⅱ表）によれば，優れた業績のうち，①にかかわるものが9件，②にかかわるものが3件，③にかかわるものが3件，合わせて15件がプロジェクト研究に関する論著である。これらの重点領域に多数の優れた業績が存在していることは，これらの領域が名目ではなく，実質的な重点領域として文学部が精力的に取り組んできた結果であると言える。また，この3つのプロジェクトの成果は，上記15件の優れた業績にかかわる論著の他，5冊の報告書や人文学フロンティア2007等を通じて，学術的な貢献から社会・文化的な貢献まで幅広く関係者に還元されている（資料Ⅱ－1－6：人文学フロンティア2007，別添資料3：「文学部3大プロジェクト」についての活動と報告書等，P2，別添資料4：人文学フロンティアに対する感想，P3）。

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

優れた業績であると判定されるものが構成員の半数以上存在すること，人文学研究の基盤をなす学術出版が充実していること，査読つき論文の掲載数が十分であること，国際的な業績が目立って多いこと，社会から注目を浴びる卓越した業績が多いこと，重点領域において着実な成果があがっていることなど，本学部の研究が，様々な分析の観点から見て，バランスよく，相当に高い水準で成果をあげていることが窺える，ということがその理由である。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「中期計画記載の3大プロジェクトに対する取組」(分析項目ⅠⅡ)

本学部では、上記の3大プロジェクトを強力に推進し、4年間で12回のシンポジウム・講座を行い、5冊の報告書等の成果を生み出した(資料Ⅱ-1-6:人文学フロンティア 2007, 別添資料3:「文学部3大プロジェクト」についての活動と報告書等, P2)。さらにⅡの(1)の4)で述べたように、プロジェクトに関連する論著には、「優れた研究業績リスト」でSとされた15編の論著があった。また、この4年間で本取組のプロジェクトのメンバー3人が学術上の賞(渋沢賞, 岡山県文化奨励賞, 岡山市文化奨励賞)を与えられたことも特筆すべきことである。これらの点で、本取組は水準の向上があったと判断される。

②事例2「文学部プロジェクト制度に対する取組」(分析項目Ⅰ)

本学部では、学際的あるいは萌芽的な共同研究を支援する「文学部プロジェクト」制度を設け推進してきた(別添資料3:「文学部3大プロジェクト」についての活動と報告書等, P2)。毎年、3~6件の共同研究や研究成果刊行費の応募を行い、160万円~440万円の支援を行ってきた。この共同研究では文学部の3割近い教員が参加することもある(平成19年度)。また、これによる成果報告書は平成16年~19年で5冊が刊行されている。この取組は、文学部の研究活動を活性化し、共同研究の体制作り役立った。

③事例3「社会に対する研究成果の公開・還元の取組」(分析項目ⅠⅡ)

文学部では、教員の研究成果を社会に公開し、還元するための取組を積極的に行ってきた。とくに平成19年度に企画された「人文学フロンティア 2007」では、14のシンポジウム・講座・模擬授業が開催され、多くの市民、学生が参加したが、企画が有意義であったとの参加者の感想が多く寄せられている(別添資料4:人文学フロンティアに対する感想(一部のみ抜粋), P3)。このほか毎年開催される市民のための公開講座では文学部教員の研究成果の一端が示されているが、これには毎回100人を超す市民が参加している。アンケートでも毎年8割以上の期待・満足度が示され、研究の社会貢献が果たされていることが分かる。

④事例4「研究支援組織の整備」(分析項目Ⅰ)

本学部では、さまざまな研究活動を効率的に支援・実行するための統括的な研究支援組織を構築している(「Ⅱ分析項目ごとの水準の判断のⅠの(1)の5)研究支援組織」参照)。平成18年度までは研究委員会がその運営を行ってきたが、平成19年度以降は研究担当副学部長を中心にしたより機動的な組織とした。この支援体制のもとで、文学部プロジェクトの公募選考と財政的支援、科研費応募に対する支援、学部内教員によるシンポジウム・講演会等への財政的支援、長期研修制度の運用、広報活動などを行ってきた。これにより、上記の新たなプロジェクト研究の推進(別添資料3:「文学部3大プロジェクト」についての活動と報告書等, P2)、科研費の申請率の向上(資料Ⅱ-1-4:科学研究費補助金の申請状況と採択状況)、各種シンポジウムの成功(資料Ⅱ-1-6:人文学フロンティア 2007)などを可能にした。